

定本
横光利一全集
第十二卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集 第十二卷

昭和五十七年六月二十日 初版印刷
昭和五十七年六月三十日 初版發行

著 者 橫光利一

校訂者 井上 謙

發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―二〇一（營業）

四〇四―八六一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社

製本 小高製本工業株式會社

Printed in JAPAN

© 一九八二

目次

食はされたもの	3
男と女と男	26
淫月	54
帆の見える部屋	92
恐ろしき花	156
閉らぬカーテン	237
幸福を計る機械	254
愛の挨拶	266
霧の中	291
笑った皇后	311
日曜日	348

解題
編集ノ
ト

井上

謙

383

定本 横光利一全集

第十二卷

食はされたもの 一幕

二軒の農家が左右より村道を挟み、向ひ合つて立つてゐる。村道は右の家の軒のきより來り、正面奥へ通つて大きな池の縁ふちへ突きあたり、更に池に添つて左手家の軒へ折れ曲る。どちらも家の軒には杉の木が立つてゐる。池の向ふには低い山脈が連り、夜なれば黒けれど、やや月が高い。(お富——半助の妻。お園——久助の妻)

久助、無言にて、旅装のまま、人眼を氣遣きづひつつ池の方の道から現れ、右手の家の壁板に寄り添ひ、中の様子を暫く窺ふ。家の中からは子供の聲がする。

「お母ア、ランプが泣いとるわ。」

お富の聲「まだ寝んとゐるのか。早よ寝んと、天狗さんが眼玉むいてござるぞ。」

久助はその壁板から離れると、また足を忍ばせて左手の家の戸口まで來り、一寸中を窺ひ、顔を曇らせながら周章あわてて來た道を引き返し、軒へ隠れる。

遠くより法螺貝の音が聞えて来る。

左手の家の入口から古敷包を持つて、その家の主婦、お園が出て来ると、向ひの家の入口の所から呼ぶ。

お園「お富さん。」

お富「はア。」

お園「今、幾時頃かいな。」

お富「さア、何時^{なんじ}やらう。さつき八時半の混合が通つたと思うたが。」

お富、入口の所へ出て来る。

お富「もう九時頃やらう。今頃から何處へ行くのや?」

お園「一寸、砂糖をかうて来うかと思つてるのやが、もう良^う人^ちのは歸る頃やのに、まだやがな。」

お富「久助さんは今夜歸つて来るのか?」

お園「はア、終列車になるやらう。」

お富「さうか、終列車か?」

お園「はつきりしたことは分らんけど、歸るなら今夜やらうと思つてるのや。」

お富、暫く考へる。「さうか。えらう早い^{きのふ}のやな。」

お園「早いことはないわさ。昨日歸らんなんのやが、どないしてるやら。」

お富「久助さんも、今度は弱つたやらうな。」

お園「弱つたかて仕様がないわな。自業自得やさ。」

お富「あの人は氣が弱いで、あんたも心配やらう、ほんたうに。」

お園「何もあんなことにさへ手出しせんだら良かつたのやけど、馴れんことをしたもんやでな。」

お富「それもさうやが、あの山崎は口ばかりの奴やでな。わしも、うすうす久助さんが株へ手出しをしたつて聞いたときにや、まアと思つたわ。」

お園「山崎つて云ふ奴は、ほんとに喰はせ物や。」

お富「喰はせ物や。そやけど、まだ山だけで良かつたのやぞ。」

お園「何んの、山だけなら我慢が出来るわいな。屋敷も田もや。」

お富「まア、さうかいな。そんなにひどい目に逢ふのか？」

お園「まだ歸つて來にや、はつきりしたことつて分らんけど、都合によつたら此の村にもゐられぬやらうと思つてゐるわ。」

お富「他愛もない。何も居ようと思つたら、どないにしてたかてゐられるわ。」

お園「さうかて、あんまり格好が悪いわ。」

お富「阿呆らしい。」と少し笑ふ。

法螺貝の音だんだんと近くなる。

お園、音を聞きながら、「あれは、半助さんの貝やなア。」

お富「ああ。良人のや。」

お園「息がよう通るな。」

二人暫く黙つて池の方を向きながら、法螺貝の音を聞いてゐる。

半助の聲「明日の三時に寺で集會がありますぞオ。集會は明日の三時に寺でありますぞオ。」

お園「何の集會やる?」

お富「さア、何んぢやろな?」

半助、法螺貝を小脇に抱いて、唇を撫でながら池の方の道から現れる。

半助、お富に近寄り、「おい、水いっぱいくれんか。」

お富「もう廻つて來たのかな?」

半助「まだぢや。これから前川へ廻りやそれでええのぢや。」

お富「家へ這入つて飲んだら良いやないの。」

半助「寄つてゐられるかい。」

お富、家の中へ這入る。

お園「集會があるつて、何の集會やな?」

半助「奥の山へ、杉苗でも植ゑる相談やる。久助さん歸つたか。」

お園「まだやぞな。終列車やらうと思つてるのや。」

半助「遅いな。もう今日で十日位たつやないか。」

お園「今日で十二日にもなるのや。」

半助「そないになるかいのう。何してるのや。」

お園「さア、何してるやらな。銀行の人と一緒に来るやろで、またごてごてするわな。」

半助「困ったことやのう。」

遠く山の裾の方から汽車の音がする。

お園、池の方を向き、「あれは終列車やろか。」

半助「あれや貨物や。」

お園「貨物かいなア。」列車の音を聞く。

半助「さつき踏切りで、犬が轢き殺されとつた。半分首のち切れてる中へ、片足突つ込んで、こないにして死んどつたが。」と眞似す。

お園「まアどうや。」

お富、茶碗に水を入れて持つて来る。半助、咽喉を鳴らしてそれを飲む。

お園「お富さん、わし砂糖を買ひに行つて来るでな。」

お富「はア。」

お園「良人うちのが歸つて來たらさう云うておくれんか。」

お富「よしよし。」

お園「風呂も沸かしてあるでな。」

お富「はア、ゆつくり行つといで。」

お園「直ぐ戻つて来るわな。」

お園、池の方の道へ消える。

半助、茶碗をお富に渡し、「辰は寝とるのか？」

お富「もう寝とる。」

半助、空を仰いで、「何んと仰山星ぎやうさんさんが出てござるわ。明日あしたもこれや上天氣ぢやぞ。」

お富、家の中へ這入る。半助はまた法螺を鳴らしながら右手の家の軒を通つて消える。暫くして、池の方の道から再び久助が現れ、静にお富の家の中を覗いてゐる。

久助「お富さん。」あたりを氣遣ふ。「お富さん。」

お富、手拭で手を拭きながら出て来る。

お富、喜ばしさうに、「あら、久助さんか。」

久助、黙つて半助の去つた方を眺めてゐる。

お富「遅かつたな。」

久助、少し池の方へ歩む。

お富「お園さんは今がた砂糖買ひに行つたぞな。ひどう心配してやつたが、模様はどうぢや？」
久助の顔は益益暗くなり、黙つてゐる。

お富「山だけで済んだのか？ お園さんの話では、村にゐられんつて云うてやが、本當かいな？」

久助、無言、腕組みをして一層沈む。

お富、久助の方へ近より、手拭を圓めて彼の顔をじつと見てゐる。「瘦せたなア、どこぞ悪いのかいな？」

久助、だんだんとお富から離れながら池の方へ歩く。

お富「夕飯は済んだのか。まだやらう?」

久助「……………」。

お富「どこぞへ行くのかな。」

久助、初めてお富の顔をじつと見る。

お富「黙つてばつかしゐて、どうしたのや?」

久助「……………」。

お富「疲れたやらう。」久助の傍へ寄る。

久助「何もかも仕舞ひや。」奥の方へじりじりと進む。お富續く。

お富「ええやないか。まア一寸、家の中へ這入りいな。終列車で歸つたのか?」

久助、動き停り、お富の方を向く。「俺はもう生きてゐるのがいやになつた。」

お富、黙つて久助の顔を眺めてゐる。

久助「俺はもう歸らんとかうと思うとつたのやが、また舞ひ戻つて仕舞うた。阿呆らしい。」

お富「何を云ひ出すかと思つたら、そんなこと云ひ出して。まア家の中へ這入らせ。良人の

は今ゐやせんのやわ。」

久助「俺は、もうお前にも逢はん。」

お富、驚く。「何ぜや!」

久助「ちよつとお前を見に歸つて來ただけや。もう逢へりやこれでええわ。」

お富「あなた、何處ぞへ行くつもりか？」

久助、黙る。

お富「ほんとに何處ぞへ行くつもりかな？」

久助「お前もたつしやでゐてくれよ。」

お富「阿呆らしいこと云はんと、早よ家の中へ這入らせ。」

久助「俺や、矢つ張りお前と逃げてる方が好かつたのや。」

お富「今頃、何を云うてるのや。このままでゐたら、良^ええことやないか。何もわざわざ人に知らさんかて、誰も知りやせん^えのやし。なア、知らん顔して、今迄みたいにしてたらええやないの。」

久助、顔を曇らせたまま、黙つてゐる。が、またそろそろと池の方へ歩む。

お富、久助の手を持つて引き留める。「あなたも氣の小さい人やな。何もこのままゐたて良^ええやないの。」

久助、手を持たれたまま、お富の顔を悲しさうに眺めてゐる。

お富「なア、このままゐておくれ。わしが可哀想や思うたら、ゐておくれえな。」

久助「お前、俺の行く所へついて来るか？」

お富「そんなこと、どうでも良^ええやないの。じつと前のやうにしとりや良^ええやないの。そしたら、あんたかて私^{わて}かて助かるのや。なア、さうしておくれ。」

久助「一緒に行つてくれ。」

お富「行きたい云うたかて、直ぐにや行けへん。わし、辰もをるし。早よまア家の中へ這入りいな。」

久助「前に俺が逃げよう云うても、お前は同じことを云うとつたのや。俺はもう、決心しとるのや。此のままにゐても、また前のやうにずるずるやし。もう俺や、この世が面白う無うなつた。」

お富、一寸手拭で眼を拭く。久助はだんだんと池の方へ近寄る。お富も少しづつ近寄つて行く。久助「お前たつしやでゐてくれ。そしたらええわ。半助さんにも、俺は罪なことをしてたが、これも罰や。これから半助さんには、良うしてやつてくれんか。」

久助俯向いて歩く。

お富「ほんとに行つて了ふのか?」

久助、黙つて靜に歩く。

お富「一寸、久助さん。」久助に近寄りその片手を持つて、「あんたはびつくりしてるのや。一日二日、ゆつくり寝てみると癒るぞ。早よまアいつぺん家の中へ這入らいせ。お園さんが、それや待つてゐやしたぞな。もうちゃんと風呂まで沸いてるのや。冷めたらなつてゐやらうで、わしが焚くわな。さア、いつぺん戻らいな。終列車で歸つたのか。疲れが出たやらうな。」

久助、少し怒り、「お前も俺も良えことしてたのやないぞ。」

お富「今頃、そんなこと云ふのは止さえつて。」

久助、お富を見詰め、「お前は……………」